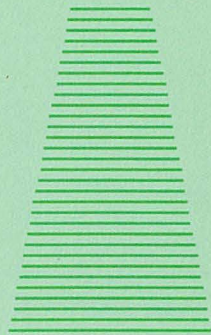


震災を体験して



子供を守るのは私しかない

松浦正子

午前五時四六分、私は小児科病棟で夜の勤務をしていた。床から突き上げるようなドスンという音がしたので、何かの原因で病棟の建物が爆発したのかと思った。その直後さまざま横揺れがおこり、私は立っていられず、床にしゃがみこんで必死にテーブルにしがみついた。ぐるぐると揺られながら「何なのよ！これは！」と大声で叫んでいた。

看護婦詰所から廊下に出てみると、病棟全体はシーンとしまりかえっており、子供たちの泣き声も悲鳴も聞こえなかった。倒れた点滴台や割れたガラスが通路をふさぎ、吹き出した蒸気で白く煙り、視界をふさいでいた。ガスもれの臭いもした。

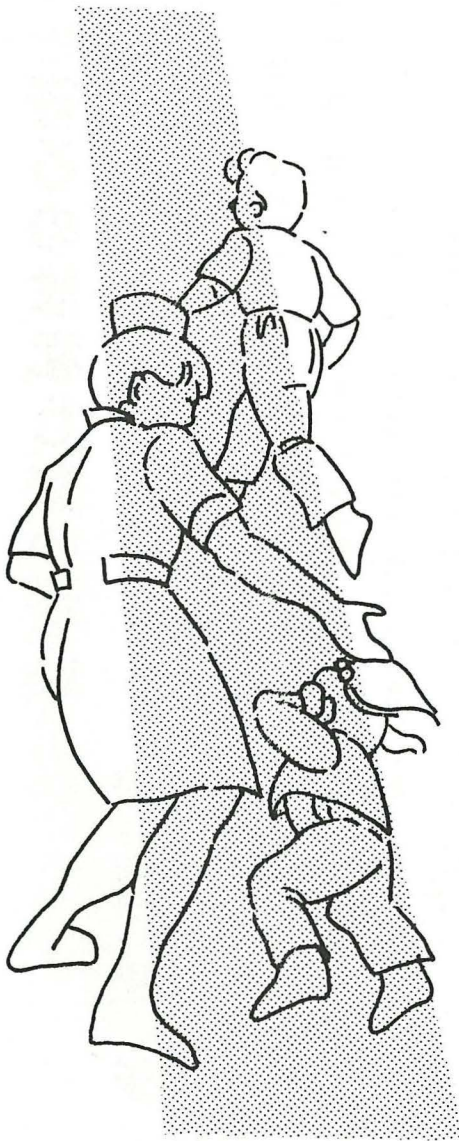
私は、患者さんの母親から借りたラジオを白衣のポケットに入れた。神戸で震度6の地震発生というニュースが流れていた。もれたガスで病棟が爆発するのではないかと言いださぬ恐怖がこみ上った。地震発生後十数分が経過していたが、病院では災害発生のアナウンスは何もなかった。電話は全て通じなかった。子供達を守るのは私しかないと感じた時、恐怖心が消えた。

私はすぐに避難できるように、子供達にヘルメットをかぶせ、非常灯をもたせ全員を食堂に集めた。泣いている子もいたが、まわりの子供たちが励ましてくれていた。子供たちは「ジェットコースターに

乗っているみたいだった」と口々に言った。貴重品だけを持ってくるように言ったところ、手にいっぱいゲームボーイのソフトをかかえている子もいた。

余震が続く中、全員でひたすら夜明けを待った。全ての患者を守りたいという気持ちと、夜勤看護婦二人と当直医師とでは重症患者さんをかかえて全ての患者さんを守り切れないという不安でいっぱいだった。

地震発生後約二時間後には多くの看護婦が集まってきた。病院の外に避難しなくてよいことを確認し、患者さん全員を病室にもどすことができた。



HEPITA

天国へ行けますように

田村 康子

その日、私は夜の勤務だった。早朝、^①採血のため病室にいたが、突然すべてが揺れた。患者さんと抱き合いベッドにしがみついた。何度も大きく揺さぶられるなか「死ぬかもしれない。」と思った。揺れがおさまると患者さんたちは「赤ちゃん大丈夫やるか」と口々に言った。私は「大丈夫、落ち着いて！」と声をかけながら一人一人のおかあさんの無事を駆け足で確認した。おかあさんたちは無事であり私は赤ちゃんのいる部屋に向かった。入口の倒れたロッカーの上を踏み倒し部屋に入った。頭に水が降ってきた。水道の蛇口が壊れ、ものすごい勢いで水が噴き出していた。赤ちゃんたちは泣き叫んでいたが^②保育器の未熟児も皆無事だった。こわれた蛇口にタオルを巻き、水を浴びた赤ちゃんを着替えさせたりした。^③非常電源のみが作動し暖房も止まり、「赤ちゃんを温めてあげなくちゃ」と未熟児たちに二枚ずつ服を着せた。赤ちゃんに暖かい環境をつくってあげるのに必要なものが全て足りない。気が遠くなりそうだった。

^④産科病棟に戻ると詰所は戸棚が倒れ、物があたり一面に散らかっていた。廊下の消毒液が全部倒れ、きつい臭いと目の痛みを感じ涙がでた。^⑤分娩室では分娩台が横転し

- ① 採 血 体内から血液をとること
② 保 育 器 未熟又は異常な症状がみられる赤ちゃんを育てる装置
③ 非常電源 災害や停電の時に、自動的に電力を発電する装置
④ 産科病棟 出産する母親の入院する病棟
⑤ 分 娩 室 出産するための部屋

ていた。動くはずがないと思っていたので驚いた。もし分娩中だったらと思うとぞっとした。その後、再び新生児室に手伝いに行った。そこはさきほどの水があふれプールのように水がたまっていた。何度も雑巾をしばった。顔をあげると皆あわただしく動いている。その先のベッドには少し前に地震でダンスが倒れ頭に傷を負ったため、緊急入院してきた生後三ヶ月の赤ちゃんがいた。その側に心配そうに両親が寄り添っていた。突然、停電になり、その赤ちゃんの人工呼吸器が止まった。すぐに医師や看護婦たちが集まる。母親は泣き出してしまった。やりきれない気持ちになりながら私はその光景を呆然と見ているだけだった。

昼過ぎに^②霊安室の手伝いに向かった。そこには何人も家族がうなだれていた。ひとつの部屋に七、八人の遺体が安置されていた。部屋は独特の臭いがした。皆、自分が使っていたであろう毛布や布団にくるまれていた。私達は遺体の身元を確認し、名前や住所を聞いた。家族と共に毛布をめくって顔を確認する。どの遺体も全身が土にまみれている。検死が終わって身体を何度ふいても土がとりきれない。腕時計をはめている遺体があった。私はきっとその時計は止まっているだろうと思ったが、見ると時を刻んでいた。その人の死と自分の生をあらためて意識した。顔を腕にあてて何かをよけるような格好の遺体があった。他の遺体より肌の色がきれいだった。家族が泣きながら私に言った。「最初は声がしていたんですよ！なのに段々聞こえなくなりました。」しばらくして御家族に温かいお茶をあげることにできなかった。とても小さな遺体があった。生後四ヶ月のまるまるとした赤ちゃんだった。母親がそばにいた。父親とは連絡が取れないという。

① 人工呼吸器

人工的に呼吸を行わせる機械

② 霊安室

病院などで遺体をしばらく預かる部屋

暖房が効かないので寒さが身にしみる。じっと座って遺体の引き取りを待っている家族の方々はよけいにつらかっただろう。怒りを私達にぶつける人もいた。夜になると運びこまれる遺体も少なくなつた。午後十時頃にようやく生後四ヶ月の赤ちゃんの父親が病院を探しあてて来た。その父親の悲しさが伝わってきてつらかった。この日、私は何回遺体を車に運んだだろう。そして「天国に行けますように」ばかりを心の中で繰り返した。この日の夜の冷たさ、どうしようもないやるせない気持ちを私は一生忘れることはないだろう。



もう大丈夫、まかして

井原康子

平成七年一月十七日、起きる前に今迄に味わったことのない揺れにおそわれ、布団の中で「助けて」と叫んでいた。少しして地震だと思った。「今日は日勤だ、遅刻は困る。早く地震止まって、この地震が止まらないと家から離れられない。もういいから止まって」と祈った。

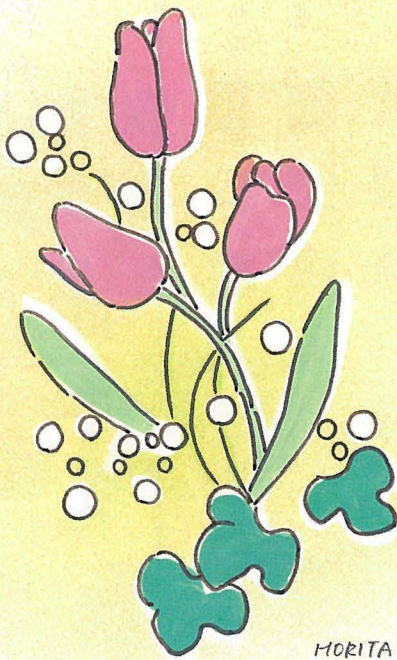
家の中の散乱状態を見て、長田で一人暮らしをしている母の事が頭に浮かんだ。母の家はどうなっているかしら、片付けに行こう。でも今日はリーダーだし、とりあえず病棟に行って早退させてもらおう、と考え散乱した部屋をそのままにして出勤した。

途中、周りの家の屋根や壁が落ちたり、ビルや教会がくずれていた。道路もデコボコになっており、これはすごい地震だと思い、ますます母のことが気になり足を速めた。

病院に着くと、廊下にはパジャマやスウェットスーツで毛布にくるまり、頭から血を流している人たちが並んでいた。その中を医師や看護婦が悲痛な顔で叫んでいる。「すごい事だ」、報道で見ている災害が今ここで起こっている。一人で恐かったとか母の事や家の片付けを考えていた自分が恥ずかしくなかった。「私は看護婦だ。今こんな時に働かなくて、いつ働くのか」と目が覚めた。廊下で並んでいる人を横目に、まず自分が働いている病棟の患者さんの事を思い九階までかけ昇った。病棟に着くと夜の勤務

の看護婦が「待ってたんです」と涙を流して駆け寄ってきた。「ごくろうさん、大変だったね。皆は無事か、もう大丈夫や、まかして」。それから、病棟内の片付け、患者さんの世話、水くみ、スタッフの食事の確保と何かにとりつかれたように全員で働いていた。

数日後、「看護婦さんはすごいなあ、いち早く来て働いていた。」と言われた。また、看護部長より「自分の事をさしおいても病院にかけてくれて、ありがとう」とねぎらいの言葉があった。しかし私は、病院の廊下の毛布にくるまった人たちを見るまでは、自分の事しか考えていなかった。今回の地震で、看護婦という仕事の責任の重さを再確認した。



患者さんがかけてくれた言葉

田中礼子

寮に住んでいる私は、何の情報も得ないまま、もちろんひさんな町並みも知らずにただ一目散に詰所にかけてつけていました。病棟は、冷蔵庫、棚、[□]カルテなどが散乱し、壁はひび割れて所々くずれ落ちていました。

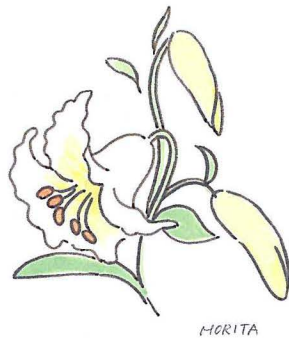
どこから手をつければ良いのか、足の踏み場もない様子にとまどうばかりでした。とりあえずこぼれた水、割れたガラス戸、位置のずれたベッド、倒れたロッカーなどを整え、なんとか歩ける状態にしました。

それから息つく暇もなく、被災で負傷した患者さんたちが、どんどん運ばれて来ました。ふだんの救急患者用のベッドだけでは、とてもおさまりきれず病棟にも運ばれてきたのです。当日出勤できた数少ない看護婦で、入院患者さんはもちろん救急車で運ばれた患者さんの看護もしなければなりません。日が沈む頃には肉体的身体的に疲れてしまい自分の表情のないのに気づきました。今となれば、大げさに聞こえるかも知れません。しかし、夜になっても赤々と燃える火事、続く余震におびえ、「死ぬかも知れない」とその時は、本当にそう思いました。あれから二ヶ月たった今も、あの日運ばれてきた患者さん達がまだまだ大勢入院しています。し

□ カルテ

医師が患者さんごとに作成する診療記録

かし患者さんは徐々に回復し、日常の行動範囲が広がっていくのを患者さんと共に喜んでいきます。そんな折り、ある患者さんに「私たちはこんな目にあって、神も仏もないと思っていました。でも神様はいたんですね。私たちにあって看護婦さんや先生たちが神様に思えるんです。」と、言われました。



救急車の列

母として看護婦として

水流啓子

家のきしむ音とともに、経験したことのないような激しい揺れを感じて目を覚ました。前日から当直勤務についている主人は不在であった。娘と一緒に寝ていた時「あっ地震や」と思ったとたんに部屋にあるものが落ちていく音を聞いた。布団をかぶり揺れがおさまるのを待った。揺れはいっこうに止む気配もなくひどくなっていくようにさえ感じられた。揺れるたびに怖がる子供たちに声をかけながら、子供を守らなければという思いで必死で子供の上におおいかぶさった。

「患者さんは無事だろうか、みんなが困っているのでは、早く病院に行かなくては、」というあせる気持ちと、このまま子供たちと一緒にいたいと思う気持ちが私の中にあった。しかし、子供とおばあさんをおいて、不安な気持ちで家をあとにした。

今回程、家族がバラバラになることに対し、不安を感じたことはなかった。この震災を体験し、あらためて家族として一緒に暮らすことの大切さを痛感した。看護婦としての自分、家族の一員としての自分を見つめ直す機会でもあった。

母親であり看護婦であることの悩み

西海英子

平成七年一月十七日、午前五時四六分、私は家族と共に自宅で地震にあった激しい揺れで目が覚め、起き上がれず上下左右とゆすぶられ揺れがしずまると家族揃って本棚、タンスの下敷きになっていた。それらがいつ自分の上に倒れてきたのかもわからなかった。ハッと気づくと子供達の姿が見えない。我にかえり、大声で子供達の名前を必死で呼んだ。頭の中では、子供達がつぶされてしまったのではないかという思いで一杯だった。しばらくしてムクムクと布団の中から子供たちが出て来た。よかったという思いで子供達を抱きしめた。外はもうれつにガス臭く、大爆発がおこりそうだった。両隣の家はこわれてしまっている。空を見ると、南も北も真っ黒い煙の柱が何本も見える。余震の続く中、自宅近くの兵庫中学の体育館に避難した。



体育館内の避難住民

病院のことが気になった。何をおいてもかけつけなければならぬが、自分の子供の安全、水、食事が確保できず、身動きができない。深夜勤務者はけがをしていないだろうか、患者さんはどうか、病院はこわれていないだろうか心配で苦しい思いだった。電話で連絡をとっただけで勤務に戻れないことが、本当に申しわけなかった。

避難所には、何の連絡もなく、救急車やパトカーも走ることなく、街は異常に静かだった。余震と地鳴りの続く中、一晩体育館で過ごした。母親としては、こう過ごすことしかできなかった。

今回の震災を通して、母親であることと、看護婦であることの難しさを身にしみて感じた。



お母さんを助けて

宮田 智子

あの日、ゴーっという地響きでふと目が覚めた。次の瞬間、激震に飛び起き身を小さくした。ガシャ、ガシャ、とものすごい音と揺れがとても長く感じられ、座っているのがやっとだった。パジャマにコートをはおり、かばんを一つ持っておそろおそろ外に出た。外に出た瞬間あぜんとした。家はくずれ、街灯も消え、信じられない光景だった。変わり果てた辺りの様子と、静寂がとても不気味だった。

しばらく立ちつくしていたが、パジャマ姿で裸足で走ってきた小さな男の子の「お母さんを助けて！」と言う声ではっとした。家の前に行ってみると、二階の屋根がくずれ、そこから母親らしき人の助けをを求める声が聞こえた。近くを歩いていた人の懐中電燈を借り、こわれかけた家に入り、二階に上がった。こわれた屋根のがれきの中に母親と女の子がいた。辺りの人に手助けを求め、やっと助け出すことができた。

ほっとしたのもつかの間、自分の勤めている病院の事が心配になりバイクで向かった。途中、全壊している建物や火事のでているところもあり、被害の大きさを感じながら病院へと急いだ。



地震による大火災の発生（神戸新聞提供）



神戸市長田区の火災跡

皆の力で生かされている自分

弘下紀子

生まれて初めて、死ぬかも知れないと感じた瞬間でした。死んでたまるか、死にたくないと思いましたが。

多くの知人、友人からの安否を気遣う電話と励ましの言葉、今まで当たり前であったものの、失って初めて気づくありがたさ、多くのボランティアの方々や次々と送られてくる救援物資の数々…。私はみんなに生かされているんだ。自分一人の生命ではないんだと痛感しました。

私を支えてくださった多くの人々に、本当に感謝しています。運よく無事だった身体、大切に生きていきたいと思えます。

そして、大好きな神戸の復興に何か役にたちたいと考えています。

それでも朝はやって来る

菅

真理子

揺れがおさまってから、倒れたタンスを乗り越え、ガラスをふんで玄関に出ようか、それともベランダから飛び降りようか、と考えたが冷静に考えられなかった。飛び降りるほうを選びベランダに出たが、ふるえた体で柵を昇ることが出来なかった。左右違う靴を手にもち裸足でやっと玄関から外に出た。

近くの高速道路が落下し、大きなマンションがつぶれ、それは恐ろしい街の姿を見た。ガスの臭いと、火事の煙と何度も起きる余震の中にいるのは、とてもこわかった。三時間歩いて病院に着いた。道々、「私の好きだったデパートがつぶれている。横だおしのトラックの積み荷のみかんをひろって持っていくか」など、いつもなら考えもしない事を考えながら歩いていった。

病院ではたくさんの遺体が毛布にくるまれ、机の上にのせられていた。一体一体、砂や血をふいでいく。ふいてもふいてもきれいに落ちない。なんでこんなふうに死んでいかんといかんかったんやろう…。と思うと悲しくてたまらなかった。一人のおじいちゃんが、私に「死んだおばあさんにもきれいな赤いゆかたを着せてやってほしいんや」と言う。病院中を探したが、あまっている赤い着物はなかった。水色のゆかたがあったので、おじいちゃんに、「青いのもでもいい」と聞くと、「それでええ」と言ってくれた。きれいな赤いゆかたを着せてあげたかったと今でも思う。



くずれた陸橋と共に転落したトラック（神戸新聞社提供）

あんなおそろしい事があっても、それでも朝はやって来る。それが最初不思議だった。毎日必ず明るい朝が来た。地震の夢や、逃げ惑う夢、爆弾が落ちる夢や生き埋めになる夢をみても。やっぱり朝は来た。あんなおそろしい地震は二度と経験したくない。

ボランティアをして 大阪から五時間かけて

尾植 紀子

大阪大学医学部附属病院

一月二十五日、夜の勤務より帰宅したところ、電話のベルが鳴り、「神戸行き」のお話があった。昨年度一年間研修させていただいた神戸大学病院のお手伝いができるならという気持ちと、前日より余震回数が増えており大きな地震がまたおこるかも知れないという不安をいדיながら翌日一人で出発した。JR福知山線から北神急行に乗り継ぎ、四時間かけて新神戸駅にたどりついた。途中の車窓からは、テレビで見た以上にひどい状況が広がっており、あらためて地震のすごさと被害の大きさを実感し、あぜんとしてしまった。今にもこわれそうな異人館のそばを小走りに病院に向かった。

病院に着くと、給水車から水をくむ看護婦と、たくさん並んでいる仮設トイレがまず目にはいった。騒然とした玄関を入っていくと、一階の柱の壁が落ち中から鉄骨のまですべて倒れているところもあった。お世話になった内科病棟に行くスタッフ全員が無事であったと聞き、ひとまず安心した。病棟での仕事は、日常的なケアはもちろん、救援物資の配給・お風呂のかわりの清拭・洗濯・掃除と看護婦の仕事は果てしなく増えた。患者さんの中には、家が全壊半壊された方も多く、退院しても帰る家のない方もいた。か

ける言葉に困ってしまったが患者さんの表情は比較的明かるく、「ボランティアの方も大変ね。」と逆に声をかけられ、とても不思議に感じられた。

多くの看護婦は家屋の被害や余震の不安もあり病院に寝泊まりされていた。表面的には明るく頑張っておられたが、心身共に疲労されていたことと思う。私は寮に泊まっていたが、枕元にはいつもリュックサックを置き、ジーパン姿で眠っていた。不安でゆっくり眠れない夜が何日もあったが、その一方では余震に少しずつ慣れてきている自分を発見した。その時は不思議な精神状態であったように思う。



MOKITA

復興に向けて

久 傳 真由美

一月十七日五時四六分、私はまだベッドの中でした。

自宅のマンションは大きな被害もなく、明るくなるのをまって出勤しました。外に出て家屋が倒れたり、いたる所で煙がでているのを見て「すごい」と思っていました。時間の経過とともに増えづづける被害者数、広がる火災・・・私はこの時始めて助かってよかったと思いました。

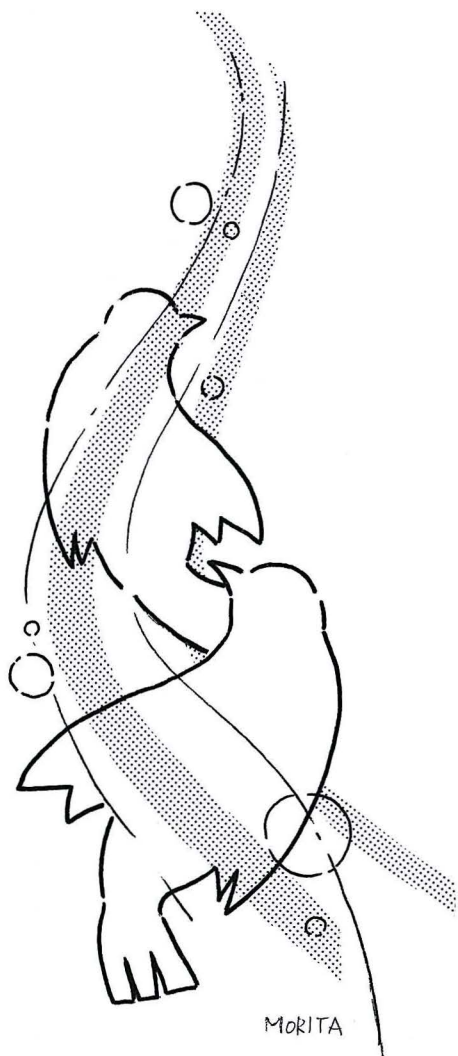
この日から私は、いっどのような仕事をしたかあまり覚えていません。先輩の看護婦に「とりあえずあれして、これして・・・」と声をかけてもらい、とても心づよかったのを覚えています。余震にそなえてのロッカーやベッドの整理、水もれの処理、トイレ掃除、水くみ、そして運ばれてくる患者さんの世話に追われていました。仕事を終えてからも帰宅するのが怖く、友人とソファアをならべ休もうとしますが、ヘリコプターや救急車の音で休めず朝になれば又病棟へという日々が続きました。

自分自身、肉体的にも精神的にもかなり疲れており、患者さんにも家族にも十分な世話は行えなかったと思います。私の気持ちは正直なところ、反省の思い半分と、せいっぱいやったという思い半分でした。

私は今回のことが、時間の経過とともに忘れられて「だいじょうぶ、地震なんて・・・」ということ

がないよう「経験」として生かしていくことが大事だと思います。

神戸の焼けあとを見て、小さな頃から学んできた広島の原爆のあとのようなだと思いました。「草木もはえぬ」といわれた広島も、今では大阪や東京と同じような生活がいとなまれています。今までと同じ神戸とはいかないでしょうが、地震の貴重な体験を生かして、我々が神戸を復興させていかななくてはならないと思います。





高速道路の損壊（神戸新聞社提供）